

● KIHS2008年～2012年度の活動

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業
共同研究プロジェクトⅢ
「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」

公開シンポジウム

第9回 戦争体験の記憶と語り

シンポジスト:森 茂起・東谷 智・中田 政子
指定討論者:中尾 知代・野上 元・松本 泉

第10回 父親の子育て・母親の子育て
—自立する親と子のための健全な分離とは—

シンポジスト:大日向 雅美・新道 賢一・濱田 智崇・
川口 彰範・中里 英樹・根ヶ山 光一
指定討論者:穂苅 千恵

第11回 美と病のトポロジー
芸術療法の過去・現在・未来

シンポジスト:木股 知史・服部 正・三脇 康生

第12回 自伝的記憶と心理療法
—記憶に触れることの困難と意義—

シンポジスト:森 茂起・北川 恵・福井 義一
指定討論者:西 欣也

公開研究会

第43回 大学サテライトにおける支援システムの評価と展望
—カナダBC州における地域家庭支援の実態から—

第44回 PTSD治療における身体症状の扱われ方
—デンマーク、ノルウェーの場合—

第45回 パーソン・センタード表現アートセラピーの根幹

第46回 父親の子育て 父親にしかできない子育て

第47回 障がい者の他者性と芸術表現

—障がいの有無を超えた芸術表現とは何か—

第48回 共に考える子育て・親育ち

—発達障がい児をもつ保護者の“親育ち”を援助するには—

第49回 人間天皇の象徴—天皇制の危機とゆらぐジェンダー—

第50回 東京裁判研究と東京裁判論のあいだ

—歴史社会学と歴史学の近さと遠さに苦慮しながら—

第51回 先天性聴覚障害の子どもを持つ親の支援を考える

第52回 アートセラピー黎明期のアメリカの例に学ぶ

第53回 アートセラピーにおける表現と癒し

第54回 アートセラピストに聞く

—11のインタビューから見る芸術療法の諸相、芸術学との距離—

第55回 「イクメン」の向こう側へ

—臨床心理士による父親への育児支援の可能性—

第56回 カタルシスの系譜

第57回 人間天皇の象徴—天皇制の危機とゆらぐジェンダー—

第58回 芸術療法をめぐる文化、歴史、医療

第59回 関係をみること、関係を支援すること

第60回 抑うつを見分ける

第61回 模倣と和解

第62回 芸術は自己表現か?—智恵子、光太郎がいた場所—

第63回 芸術療法と芸術学の対話

第64回 「心理臨床」という専門性の共有を考える

第65回 『鉄の籠』のなかにあって「閃光」に打たれること

—二十一世紀世界の恐怖／暴力／知性—

第66回 社会的引きこもりに見る親と子の関係

第67回 発達障害と過去の体験—タイムスリップ現象再考—

第68回 恒藤恭における戦争責任と平和国家の考究

—日本の「和解」と「更生」の問題から—

第69回 セラピストとしての芸術家

—参加型アートと複数の場をめぐって—

第70回 発達のトラウマと現代自己心理学

—治療的二者関係における至適な距離—

第71回 筆跡が世界を開く—アートとセラピーの間

第72回 ハンセン病問題にみる<加害—被害>関係から

第73回 いじめ<加害者>の自己のありか

その他の企画

心理臨床ワークショップ(6)～(10)

園芸療法研修会(6)

アートセラピーワークショップ(1)～(4)

子育て応援講座(1)～(2)

子育て支援者スキルアップ講座(1)～(2)

思春期発達支援研修会(3)～(6)

<公開ミニシンポジウム>

「子育て意識研究のこれまでとこれから

—プロジェクト15年の活動から—

<講演と公開合評会>

「アートセラピー再考」

叢書<心の危機と臨床の知>

第12巻「<戦争の子ども>を考える—体験の記録と理解の試み」

森 茂起・港 道隆編

第13巻「子別れのための子育て」高石 恭子編

第14巻「アートセラピー再考—芸術学と臨床の現場から」

川田 都樹子・西 欣也編

第15巻「自伝的記憶と心理療法」森 茂起編

発行年月日：2014年3月17日

KIHS NEWS LETTER 2014

Vol. 31 発行

甲南大学人間科学研究所 Konan Institute of Human Sciences
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学18号館内 Tel/Fax: 078-435-2683 E-mail: kihs@center.konan-u.ac.jp Web-site: http://kihs.konan-u.ac.jp

今年度最後のニュースレターをお届けします。

今号には、昨年度発行し、好評をいただいております、
報告書「心理臨床家「事例の読み方」に関する調査」と、
さきほど行われました、
第11回KIHS心理臨床ワークショップの記事を掲載しました。
ご味読ください。



編集後記

うえに、2008年度から2012年度までの活動をまとめました。おかげさまで、この5年間、研究会や研修会、シンポジウム、出版などを多くの成果を生み出すことができました。今後も研究活動、実践活動を継続し、KIHSのさらなる発展をはかってまいりたいと、決意を新たにしました次第です。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど、どうかよろしくお願いたします。



活動報告

プロジェクト4では、2012年8月に行った「心理臨床家の『事例の読み方』に関する調査—初学者と資格取得後10年の経験者との比較を通して—」の調査結果を分析した報告書を作成し、2013年3月に刊行するとともに、9月には、日本心理臨床学会第32回秋季大会において発表をしました。

この調査は、2009年6月に実施した「『若手臨床家の事例の読み方』に関する調査」に続く、第2回目の「『事例の読み方』に関する調査」となります。第1回目の調査では、臨床心理士資格取得後5～10年の心理臨床家30名を対象に事例理解についての記述を収集し、それらを質的データとして「見立て」、「技法」、「事例の展開」、「身体化・行動化の評価基準」、「連携」といった視点から分析を行いました。今回の調査は、<初期情報からの見立て>に焦点をしばり、第一回目の調査結果を発展させることを目的として企画・実施されたものです。大学院を修了し臨床心理士資格を受験する以前の心理臨床家20名と、臨床心理士資格取得後10年目の心理臨床家17名、計37名を調査対象者として「見立て」に関する記述を収集し、それらを質的データとして分析が行われました。

グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析を通じて、まずは、見立てる行為に関する仮説モデル図が作成されました。仮説モデルでは、心理臨床家が事例情報を意味づける過程を、(1)提示されている情報への着目か、提示されていない情報への着目か、(2)事例情報への関与が受動的か能動的か、(3)読み手の有する理論等が意味づけの過程で援用されているか、といった視点から区別し、「記述」「諒解」「解釈」「推測」という4つの行為をカテゴリとして抽出しました。それらの情報が総合され全体的な「評価」となり、最終的に、「クライアントの課題」「留意点」「方針」「カウンセリングの効果」といった、「カウンセリングの方向性」を打ち出す流れと、「展開の予測」へ向かう流れが図示されました。

抽出された各カテゴリの文章数を、資格取得前の心理臨床家と資格取得後10年目の心理臨床家との間で統計的に検定し比較したところ、サンプル数が少ないこともあって統計的に有意な差は認められませんでした。また、カウンセリングの今後の展望に関して記述された文章について、具体的なイメージが含まれているか否かを判定して統計的に検定した結果では、資格取得後10年目の経験者の方が、具体的なイメージが含まれていると判定される文章数が有意に多いという結果が認められました。

これらのことから、経験によって得られる「見立て」の内実とは、1.事例に沿う形で情報を意味づける点(諒解)、2.得られた情報を理論等を用いて意味づける点(解釈)、3.近い未来を予測しそこから対応等を案出する点(展開の予測)、4.面接での具体的な対応をイメージして描き出す点(具体的イメージ)にその特徴があるのではないか、という仮説が導き出されました。

今回の研究を通じて、心理臨床家が現場での研鑽を経て身につける「見立て」の性質の側面を明らかにすることができました。この「見立

プロジェクト4. 心理療法の現在に関する検証 —臨床と研究の即応的関係の構築—

報告書

『心理臨床家「事例の読み方」に関する調査—初学者と資格取得後10年の経験者との比較を通して—』

(2013年3月発行)



て」という言葉が精神科医の土居健郎によって提唱された背景には、診断が単なる分類のためだけに用いられて治療に貢献しないことに対する批判があったとされます。近年、精神医学分野においては、DSMやICDといった操作的診断が整備されてきましたが、これらは、現在のところ「分類のための診断」という側面が強いものであることを考えれば、見立てるという行為は、操作的診断とは異なる価値を持つ専門的行為であるといえるでしょう。本研究は、「見立て」という、心理臨床家が実務を通じて身に着ける専門性の一端を示すとともに、心理臨床家の養成課程においてどのような訓練を準備すべきかの指針ともなる知見であり、意義を持つものと考えます。

*報告書は人間科学研究所WEB (<http://kihs-konan-univ.org/>)で公開しています。また、冊子配付をご希望の方は、メールにてお申し込み下さい。(件名を「『心理臨床家事例の読み方』に関する調査」報告書希望頒布希望)とし、本文に①お名前、②ご住所、③年齢、④職業をご記入のうえ、kihs@center.konan-u.ac.jpまでお送り下さい。なお、数に限りがあります。ご了承下さい)

第11回 KIHS心理臨床ワークショップ へき地医療と臨床心理学的支援

日時:2014年3月2日(日)10～17時
会場:甲南大学人間科学研究所(甲南大学18号館)
話題提供:岡田 憲(社会医療法人石州会六日市病院／臨床心理学)
指定討論:長谷川 明弘(東洋英和女学院大学／臨床心理学)
宮川 貴美子(甲南大学文学部／臨床心理学)
企画:富樫 公一
(甲南大学文学部・人間科学研究所／精神分析・病院臨床)
共催:甲南大学心理臨床カウンセリングルーム
後援:兵庫県臨床心理士会



人間科学研究所では、地域の専門家を対象に、研究事業に関係した研修会を毎年開催しております(研究事業の詳細はウェブサイトをご参照ください)。今年度は、2014年3月2日に、東洋英和女学院大学准教授の長谷川明弘先生と、社会医療法人石州会六日市病院臨床心理士の岡田憲先生をお招きして、「へき地療養患者に対する臨床心理学支援」と題する研修会を実施いたしました。人口の高齢化、地域経済格差、地域医療格差、過疎化、といった問題は、それぞれ独立したものではありません。それらは相互に影響し合いながら問題を複雑にし、今後ますます大きな問題になることが予想されるものです。

午前の部では、へき地医療拠点病院で臨床心理学的支援を実践されながら、へき地在宅療養がん患者とその家族のニーズについての調査を行っている岡田憲先生に話題を提供していただきました。岡田先生のお話しによれば、へき地在宅療養がん患者とその家族は、「生活上の問題」、「治療上の問題」、「対人関係上の問題」を抱えており、その問題を、地域文化に深く根付いた対人交流上の「気兼ね」が複雑にしているとのことでした。

地域文化に深く根付いた「気兼ね」の問題は、当事者ではなかなか気づくことができないものであることが、大変興味深いものでした。また、「気兼ね」という用語は、相手への気遣いという肯定的な側面の意味を持ち合わせながら、相手と距離をとろうと防衛的に機能する側面をも含む言葉であるということを改めて実感する機会となりました。

午前の部の後半は、へき地と都会の比較検討がされる必要性についても議論されたほか、研究結果以外にも、この分野に興味関心を抱かれる実践家の方々とへき地医療に関する多角的な議論をすることができました。その結果、今後の実践臨床における、具体的な応用を学ぶ機会をいただくこともできました。

午後の部では、甲南大学非常勤講師の宮川貴美子先生が「高齢者への箱庭療法の可能性をめぐって」、岡田憲先生が「老年クライアントと若年セラピストとの心理療法一次の自分へ夢を託すニード」と題して、臨床事例の発表を行いました。この会でも、それぞれの事例について参加者の方々と活発な意見交換がなされました。

宮川先生の発表からは、箱庭と描画は、それぞれが表現している世界が異なることを学ぶことができました。また、高齢者のクライアントとの心理療法で、セラピストとクライアントが、一緒に作業をすることの意味について考える良い機会となりました。岡田先生の発表では、「高齢者の心理療法の目標とは何か」について議論していく中で、その話題を起点として、「セラピストがクライアントにとってどのような存在であったか」、「その求められているものに対して、セラピストはどのような姿勢でセラピーに取り組んでいくべきか」という話へと発展していきました。そこでは、上記の話題についての様々なアイデアが挙げられ、多方面からその話題を検討することができました。

高齢者の事例について、このように多くの方々と議論を交わす機会が少ないこともあり、この度のワークショップは、大変有意義な時間となりました。

(伊藤 光)